

やぶなべ会報

自然を見つめる「やぶなべ会」(青森)発行

誌 名	やぶなべ会報
号/発行年/頁	22 / 2007 / 50-51
タイトル	溪流魚も森林生態系の一員
著 者 名	五十嵐正俊

自然を見つめる やぶなべ会 (青森)

溪流魚も森林生態系の一員

第3代 五十嵐 正俊

都会の喧噪を離れ、郊外の森林地帯に足を伸ばせば、心地よい森の空気が流れ道端には可憐な草花も眺められ、そして小鳥のさえずりとともに耳に入ってくるのは都会や田園地帯では見ることのできない溪流の水音ではないでしょうか。

一部は滝となり、音を響かせかせながら水煙を上げているところもあれば、苔の蒸した岩の間を激流となって流れ下ったかと思えば、透き通って川底の小石までがくっきり見える緩やかな淵となり、淵の下流はまた早瀬となって次の大きな岩壁を伴った青々とした深い淵になったりしています。



[写真1] 森林と河川 (野内川中流域)

このような山間の溪流に棲むのがイワナ・ヤマメ・アマゴなどのサケ科の魚です。とくにイワナはヤマメなどの棲めない源流域にまで分布しています。

最近、年々溪流釣り愛好者が増加していますが、これらの溪流魚の天然分布地域が次々消えていく傾向が見られることは誠に残念です。関東以西ではすでに「幻のイワナ」などとささやかれ、溪流釣りの対象になっているのは、養殖放流したヤマメ・アマゴ・ニジマスなどになっています。

サケ科の魚は一般に親魚が最上流域に遡上して産卵し、孵化した稚魚が流れ下つて、場合によっては海中生活の後成魚となり、また、ふるさとの川に遡上するサケと同じ様な生活をする個体もあります。サクラマス(陸封型がヤマメ)・アメマス(イワナ)などがこの例で、ヤマメでは北方系のもののほど雌の降海性が強く、溪流で釣れるのはほとんど♂ヤマメしか釣れない川があります。♀はいわゆる銀化ヤマメとなって海に下つて行きますが、立派な親マスになって、産卵のためふるさとの川に遡上して見たら行く手には高々と砂防堰堤が構築されいたとしたらどうなるのでしょうか？ヤマメはこうして北日本の多くの谷川から消えてしまったのです。

残念ながら、森林地帯に構築された治山ダムや河川改修の構築物の大部分は水系の生態系を無視した工法で施工されてきました。また、森林の皆伐は溪流魚から隠れ場を奪い、斜面からの泥流は産卵場所を泥で埋め尽くし、溪流魚の棲息環境をどんどん破壊してしまったのです。このような河川が日本中の森林地帯に無数に存在しています。

戦中戦後の大増伐によって禿山になった山を復興させるために、治山治水は緊急を要する事業であったわけですが、残念ながら溪流の生態系をずたずたに寸断してしまいました。当時はヤマメ・アマゴ・イワナなどは山林業務に従事する人たちの貴重な蛋白源の一部でしたが、これに比べ、治山工事は無尽蔵にいる山の雑魚よりも国民の命・財産を守る大切な事業だったのです。しかし、結果として溪流魚の棲息環境は著しく破壊されてしまったのです。

ヤマメ・イワナは肉食性で水中の昆虫などを食べていますが、春から秋は水面に落下して流れてくる陸生の昆虫類を主食にしています。この性質を巧みに利用したのが毛針釣りです。

溪流魚が定着し、自然繁殖するためにはそれなりの環境が維持されなければならないし、環境が良ければ超名人級の人が日参しない限り1年で絶滅する心配はまずないでしょう。適当なルールが



[写真2] イワナ



[写真3] ヤマメ

守られ、場合によっては谷ごとに休漁・禁漁などの適切な河川管理を実施していけば、楽しい溪流釣りが末永く続けられるでしょう。

ヤマメ・イワナなどの棲息域は最初に述べたように山間の溪流ですが、溪流の様相は森林の取り扱い万一つで大きく変化します。しかし、残念ながら森林施業と溪流魚の係わりを具体的に研究した例は日本ではまだ非常に少ないようです。

溪流魚も森林生態系の一員として取り上げ、生物的多様性を維持しながら快適な自然環境を人々に提供し、なおかつ自然の恵みの一部である木材資源を有効利用する管理手法の確立を目指して新しい研究課題「多様な生物群集を維持した快適な流域管理技術の開発」(森林生物部提案)が計画されています。

研究が具体化されるまでまだ1～2年かかりそうですが、関西支所としても「イワナ・ヤマメのウォッチング」ができ、または溪流釣りもできるような、より楽しい森林浴をめざして新規課題に積極的に対応すべく準備を進めたいと思っています。

【追 記】

雑書類の整理をやっていたら、森林総研関西支所時代に同支所の情報誌に書いた1文が出てきました。すでに会報13号(1998)に「営林局から林業試験場そして森林総合研究所」というタイトルで触れていますが、これを書いた当時の状況を掲げておきます。

当時は未だ正規の研究課題としては認められていなかった課題でしたが、昭和30年代、目黒の昆虫研究室で飲みながら当時の東大教授兼務だったNさんや鳥獣研究室のUさんと気炎を上げたことがありました。

「林業試験場では溪流魚も研究課題の一部にするべきだ!」以来、酒を飲めばこの問題で気炎を上げたものでした。当時は誰も相手にはしてくれなかったのですが、数十年経って私も中間管理職の末端の地位になり、公式の場所で発言出来ようになっていました。そして新規研究課題候補の提案募集があつて、提案したのがこの課題でした。

世の中も変わり、森林の効用も用材生産から森林生態系重視へ変化しつつあったのです。そのような背景があつて、今こそ持論を実現させるチャンスだと思ったのでした。

幸い、提案課題は私の定年後に正規の研究課題として認められたのでした。その時、研究紹介の1文に書いたのがこの原稿でした。